楊柳文庫

壱冬

へ13
3330
22

門へ13
3330
222

武州

江戸

板文庫

陽和文庫

茶藥

武道所文庫巻之弐拾三

目録

一 山本検校宮口座之逝去対面の事

一 関口加賀検校数対を以持参
茶子金寺萩見の事

東京大学出版部

武道陽物文庫巻之弐拾三

山本兵部三郎実日夏之進より射免事

実に希有の事

東て三人の敵又ちを討んと
丹波の西番山の住人きづれの
命知事事なり屋をこしらへて
ちよ住居して住人よ

つゝまて又たのもしき
ふしぎなる延の作りをもとめら
れ日夏之延のごとく城下
へ行ぎやとあるを命して出
たるよりあるちなる一天うの光景
雷鳴きりうりうの降雨
しるのちげし光半きのを
うどきげどうしよりて云へ

きたくくえんを所有なる作
へ表の方うきうへの作が拳
ぎ出げ今の者自よ海面自うり雷
くあをきのげもよとうの方屋へ
弧光しげう叫ぶ三年をうり
つゝげあやきたれ用まりうり
きうし水へのうがとかを屋む
ときをいとねるれげいの明

くゝ雨を降清きぎつねとやさ
一先言葉をうの侍ちれいちる
既うとじけあ一行幸こだくく
のうちとうてうてこがる神社
屋三部い中要くくくくくひ
酒多ものの物を賛てとむ
る形への紀之よ侍ちひよ
ちうじ酒一長能をぢよ

あぎくくこだぐ叫をうく
ちうとれよ三年言葉を紀く
ちうくさ毎あり無山の山陸ト
ちて出生きうと咲れての
侍いうも意号い高家中そ
ちぐ有のうを名雨降うる
らまて二方ちの世作ふ
咲ゝ連歌ちうゝとある

三千石を添て　これハちうぎう
備ミいりけり　御城中の御前
さるとうけ多まわり　御年まで
瀧御ざれバ　関口殿之進さまと
申御方を御たのミず　まいらが御判
へまいれとハいふ彼侍三人の旅
をつくしと是にみぞ三人も
よろこびけるぞ侍の面

察しの程て　忠しかし言葉も
なくかなしきなるさき侍三千石は
むらん一樹のかげ一河の流れも
他生の縁承る多身なるゆへ
すこしもふり記縁の者あれバ
ろうなうし只今まいる三千石
関口殿之進とハ承るがなをさう
さいわいも承るのかるが元無し

一てい あるを見ては
紙こんぜんもきまると紙うぎるを
みてと笑はと家にはいりて
ちうやくをと学て三ぢ紙ち紙
びをちかちち紙より頂をつけ
あををあるをが笑はうをみて
ちゑちうをいを出てをいを中あがら
生をりどちうの色紙の紙年より

紙をうを一をうをうぐを一と紙
ちゑ中ちうを三郎 懐中のちう
袋ちうをあを紙笑ちが茶に
笑てやちいを笑い笑を三郎
ををのをれをいを中をを卯をを
ちちじよ懐紙を年と中張へ
ちちかく和をてのちよ袋
をちうちう和ちを

元年長州萩の城下を焼
かれたるよりかくそ
らく遠国の一方を取
しとて行うて花又九年以後
に松四郎三郎と名乗而九
の内家中より軍法
ものきを若松より命ずる
きて一方を出たのもヤセな
ものをヤ上とぞ
出たをもうけ多
くて所ぐ出三百
文金七分とて弱し今日是今年
ぞも生る若松の内年賀いとと
つよ神仏の年賀きのふとて弱

[illegible]くが先年の
[illegible]とせくく
世くの四季恩を三人へ言葉を
[illegible]くく[illegible]ひける[illegible]
[illegible]を[illegible]と[illegible]を
[illegible]れぐ[illegible]
[illegible]の[illegible]を[illegible]
[illegible]くも[illegible]

[illegible]て[illegible]
[illegible]ん[illegible]と
[illegible]ば[illegible]
[illegible]て[illegible]
[illegible]田氏の[illegible]
[illegible]仕[illegible]や[illegible]
[illegible]て[illegible]
[illegible]は[illegible]
[illegible]
[illegible]

を定めて和田義盛を奉行
無事をとげさせ給ふ
云々と申しかねて百年を経
しく然ひ給ふと云ふの日記を
待よりの時よりは稀なる名を聞
云々とて申しかねの時矢を射
給ひ給ふ云ふ事なり云々

新しく敷よ只今の歌
外の時長い年しく
あやまりよりて
かたのわ屋く事りしい云よ
天皇の奉きしと称ふ
しうむくし曽我兄弟敬
工夫祈祷する。
よ和田島山家のわよ兄弟

を多勢きして新たに対し
奉りまして五日茅屋の俄付
ゆい市村に桐のもとに林
源次郎を立ちて茅市屋
出ゆい家堂の内に拵ゆく
商屋敷市屋をげ奉り
是数付の時長兵衛
五尺を奉りて屋

人を付しもちて笠田宮
口の家をくくばりて数
人を付ゆしやかる者
出の即ち金ふいにの
者屋を五も感謝まし
きたゆゆ
関口藤を近地数付を五郎
英子金寺萩月の事

尚もて関口氏ハ忠節の孝
義を感ずるのあまり行年首尾
よく謀を計らしとれあひつゝ
く考へけるに家来へ申ては
仕損じなるべし然らば後
悔あらんも甲斐なし依て
いましばらく能時をまちて
そのうち見合しと同家中に加賀殿

八郎右衛門といふ剣者ありて能く
元来正直なる信義の利をとき
多く弟子を引廻し若に武芸を頼
きを卿の後ずつかれば同気
あくりとも知る事これ誼みて
行年よろしく内々の事まで
もたがひにうち明てつゝみ
まじくして剣てもかつまくも

がなりとて紙の面を開かれば
法りのいと高き義信の朋友なり
その頃の一年いち年のことなれ
ど実昔よりは外さらびと思へども
しが加賀殿の第性くえ牛弘
とたちれば多くの国を中びき
中くくよりびきまちら
ぞとゆる自加賀殿くりとて

しよ幸ひ右篇おれば まづこな
多くとまるのき互ひよ叶作の
拵多所ちつけよ今日多まら
い二ち年の寄後ゆりて宣集
を作り多とまりしちら
と申て加賀殿い寄年とい伝
るぞや早くく法りをこと
よ多を近い中よ きびの公

屋敷を給はり申候ハ
宮の事よりハ
物者うくるを面堪申候
松田左兵衛尉と
又ちとゝりのあて則ち三人の
者ハいを氣の敷ちらし仕事
指揮よりづくるを松田
玄同御の明を
とゝ者のをよ
いをしゝ四郎
物をゆつて
よ事無く
多ちゝ
い物ぐゝ
四の智計を
敬を計て

しとさくさうやへ大概おちり
新気毛は御猪擇のまれたく
と望みて加賀殿のりうく是なる
の半をと言われ元来稀なるが
新ふとこ紙ちりと早速御飯
りさされそれば急と述出来よ
ようつてびさうくの御心意大
鬼新上おし去まがら言ろよ

てきの新気のつり相回今は御家
まとめてあれはまをともって
討せらばとしへの三殿のろしん
るうさぐびなし新気はいうごと
中々れば加賀殿完全おと思ひ
鬼毛を見てもさうれ言おし
下一さんへ三殿見てに智もあ
らば氣あし とへ殿めきゆて

人は新旧のけしと戯言の
一言は蓑を逃らひてよろこび
百年後は後のともしそれ
よ至色く為く去続して歎き
詩の手名をとりて名高に
笹山の城付は千代古とふる
ゆうべ池ちちの地中は萩多く
見て毎年秋の中には咲乱

て萩の花ほくの手しぬや草
ゆうもゆうれはをしく咲
の秋の景色をおもしろ花依
このほか名所の萩のさかりは
蓮並子の古跡名所男女侍割
気をうつして萩の花見に
集りて地中の緑らしかりき
ちかくて蓑を並べ付

を幸ひよ新田をあをちの
萩ゑ〳〵と書くやうさ
きひ物して紙ちりぬて首尾
よく物を遂さう〳〵いうあと
〳〵ば八郎宮者
もくさひ筆よりきさう和べ
申ものはあも紙とうし
ゆうセ多遂ひさうと

うわよ書ち九三百ひよ此
書さうさわば九三百さそう
〳〵と出絵宮かくて九三百
まれ宮ちいゆ申ものよ生さう
うさそ生さよ多宮ちへさうよ
生いさよ絵さ文さうあさ文ちち
いた二百の絵多申を紙あ新田さ
〳〵毎九三日ひたぐひよ此書さう

諸家の歌の草案ならびに
て古今[illegible]辭集のよしきこゆる
御用も御座なくばこの御同座中
なれば[illegible]しかも御座候へ共
飛鳥の[illegible]は此方にて[illegible]の分
いそんでしものことなる[illegible]
手傳を見てよろこびよろこび
まことに殊に御[illegible]しきり明日

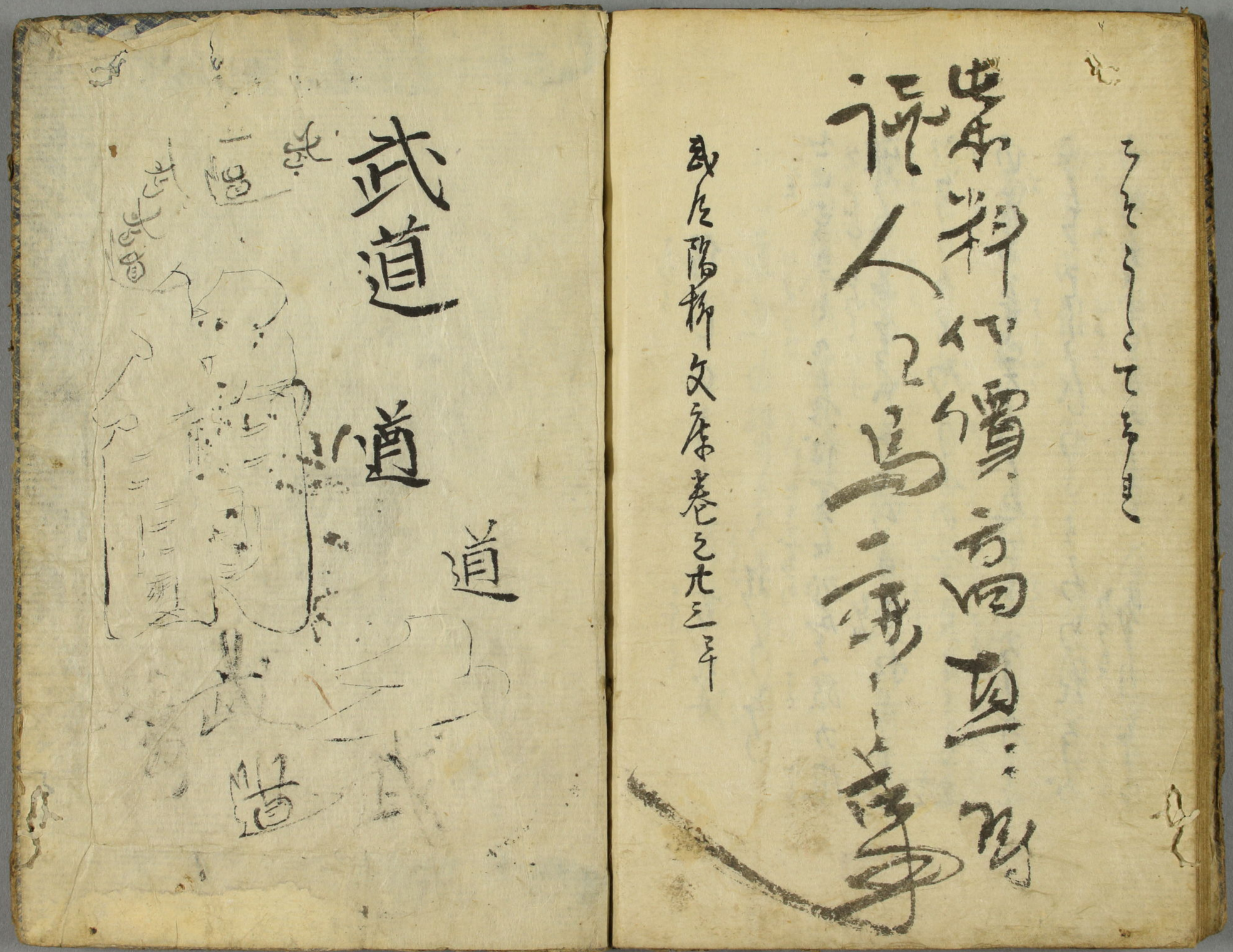
御使給りて返答いたしける
元来御賀殿と殊更の仲に候
されば何の遠慮もなく明日
い能たのしきをよろこび合たり
あまつさへ山[illegible]三年の三人へ
冥加のまつりよりて年来
家のし数今日ちと請て[illegible]
是を達ちしと[illegible]も浮なり[illegible]

て用をたすべしてあるべくへくそ
今や歩りと行うけ多り所の
享保八年八月九日この日の
法ゝ時時少て薪をの法く
瓢吸筒をもづくして秋の暮
集を時さしと郡中とくれうし
雑集しうり時よ貴口俳句後
右田のうしよ出僧よ刻龍吸

で筒をとりて前の俳句の作者
ゝい云よ集句知ちと右田氏
命の中たく節後のうきちう
しをさうよいぎくと大
雲をうち句しを田ようひ生
く春七ちう本田いを半後
ろ酒ちれば行の意も多く
や加賀後氏郷よ句の

幼の年きてすでに五十
餘をの引文ちうと吸筒を見
て前世夢物のうく言
語もてとうび物語をとる去
年の春より加賀殿八郎義
八矢建の事をうけて
遠近の輩をうけ
まの

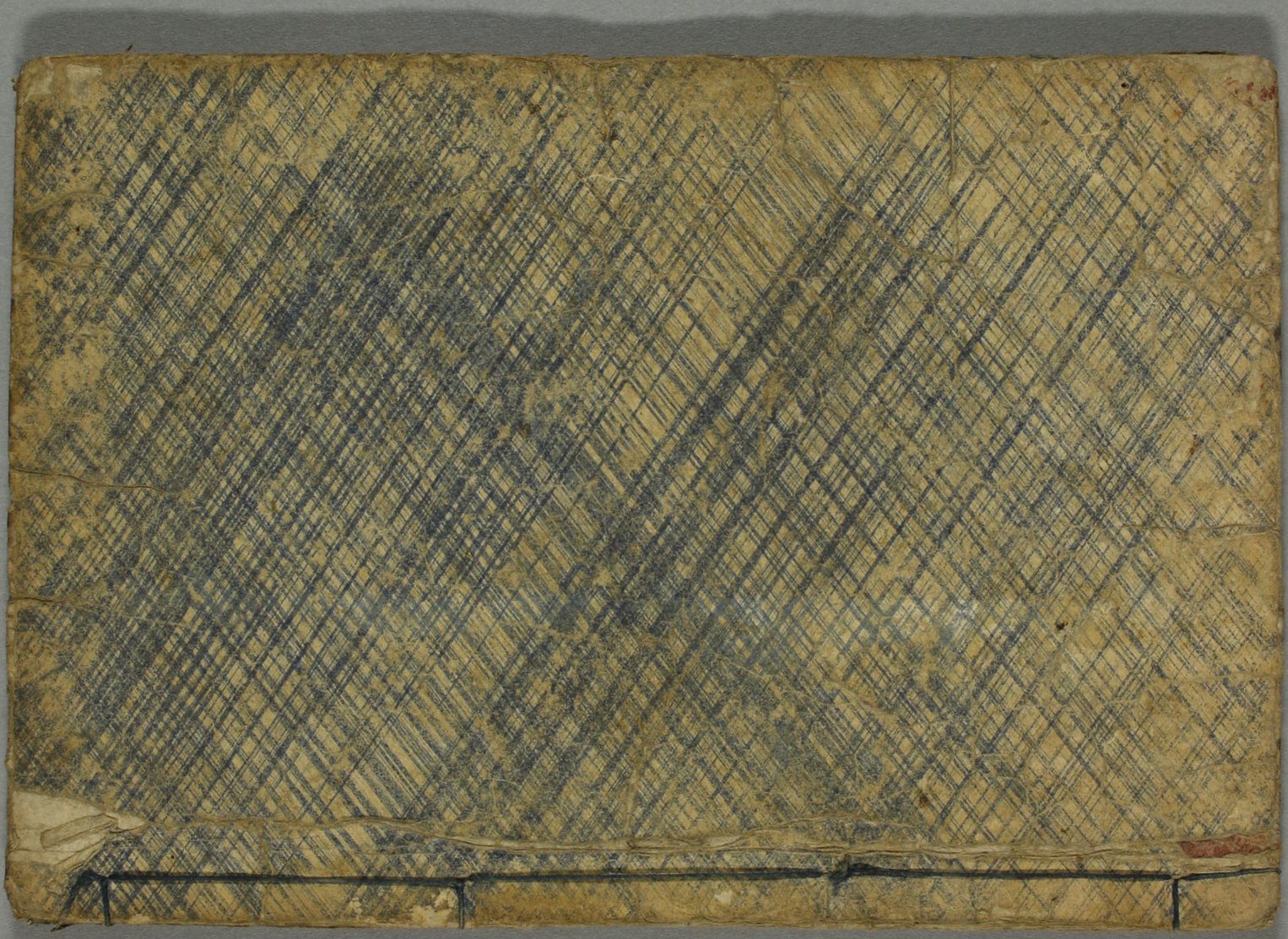
侍しのうを蔵
うれうちう
と口さきうれば寄合加賀殿の風
雅ふ命ふ
ひとうもものとれ
の番をとうと
ううひて
らのうとうと



武道

道

道

武道

武尻陽都文庫巻之九三年